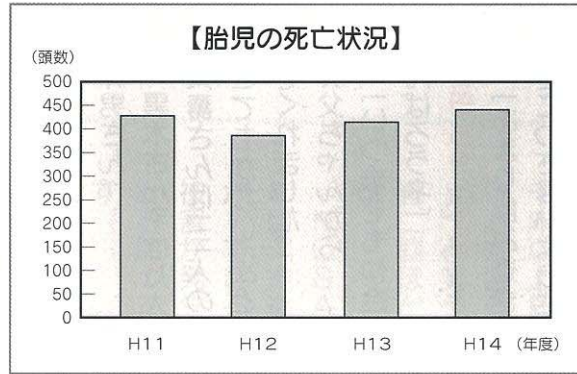


診療所だより



昼間に分娩させるためには

管内では、胎児死（人工受精日より二百四十日～分娩日）が平成十四年度で四百四十二頭になっています。時々、「うちん牛は夜中ばかり子を生むが」「牛舎内で仕事をしている時間帯に子を産んでくれると助かったよ」と「このような話を耳にします。



昼間の分娩で事故防止

胎児死については、全てが分娩時の事故ではありません。しかし、昼間の分娩率を増やす方法があります。それは特別なことをするのではなく、エサを与える時間を変えるだけでいいのです。具体的な方法は次のとおりです。

夜間給餌による昼間分娩率 (単位=頭・%)

畜産試験場	給試頭数	昼間分娩率
鹿 児 島	225	84.4
島 根	22	73.0
沖 縄	35	74.3
宮 崎	27	81.5
長 崎	18	77.8
茨 城	76	61.8 (80.3)

■午前6時～午後7時
茨城では午後6時までと()は午後9時までの分娩率

— 具体的方法 —

- ①分娩予定日の7～21日前から通常1日に与えているエサの量を毎日午後4時以降に与えます。
- ②水は自由飲水とします。
- ③翌朝8時30分まで自由採食とします。
- ④8時30分になったら飼槽を片付け、その後はエサを与えません。

— メリットとデメリット —

- 昼間の分娩が多くなるので、分娩の監視が容易になる。
- 難産かどうかの判定、分娩時の圧死等の事故を防止できる。
- 初乳の摂取状況がわかりやすい。すなわち、丈夫な子牛にすることが出来る。
- ※初乳を飲まない、あるいは飲ませない場合は、凍結初乳や粉末初乳等を与えることが出来る。
- 牛を管理する人の精神的、肉体的な負担が軽減できる。
- ※夜間や深夜に分娩に入った場合、なかなか手伝いに来てもらえない。

↑注意ください↑

すべての牛が昼間に産むわけではありません。分娩二週間くらい前から分娩室に牛を入れ、よく観察してください。